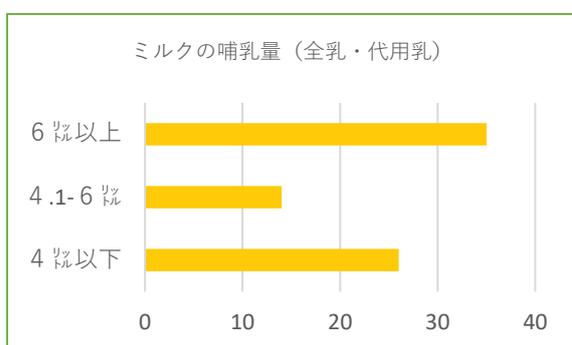


## あしよろ・ハードサポート通信

平成最後の大寒波、町内でもマイナス30℃前後まで下がった地域がありましたが、それを越えてからは、ずいぶんと穏やかな気候になった感じがしています。先月に引き続き、町内での哺育育成牛飼養管理についての聞き取り内容をご報告します。

### ◆ ミルク（全乳・代用乳）の哺乳量は？

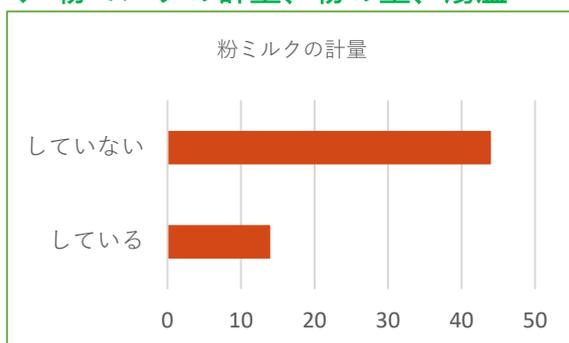


哺乳量は従来、1日4%給与が一般的でしたが、哺乳量を増やすことが下痢の原因になるわけではなく、哺乳量が多いほど健康に育つことがわかってきたため、ミルク量を増やすことが推奨されるようになりました。

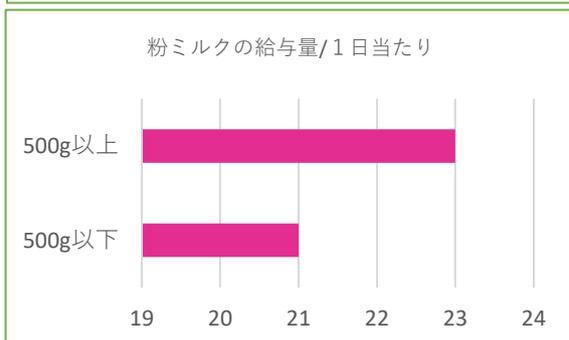
町内でも、全乳または代用乳を1日4%以上飲ませる戸数が増えていました。該当する酪農家さんたちからは、子牛の発育が良くなった、病気になりづらくなった、といった声が多く挙がりました。

反面、哺乳量を増やすと手間や体力的な負荷もかかるため、哺乳びん・バケツを運ぶための台車、哺乳びんホルダーの活用、といった省力化も考えていきたいところです。

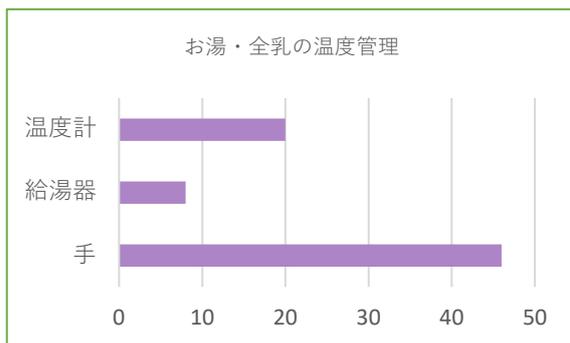
### ◆ 粉ミルクの計量、粉の量、湯温



粉ミルクを毎回計量する酪農場は全体の1/4で、多くは「カップ〇杯」の管理でした。重量は、実際に何g給与しているかわからない、という声も多かったです。巡回時にハカリを持参し計量しました。



一般的な代用乳の紙袋には「1日4%哺乳、粉ミルク500g給与」の記載がまだ多いのですが、わたしは普段、子牛の増体や抵抗力UPを期待して、1日6%以上、粉ミルク800g以上の哺乳をお奨めしています。代用乳の質・成分によっては下痢のリスクが上がる場合もあるので、不安な場合は、ご相談いただけたらと思います。



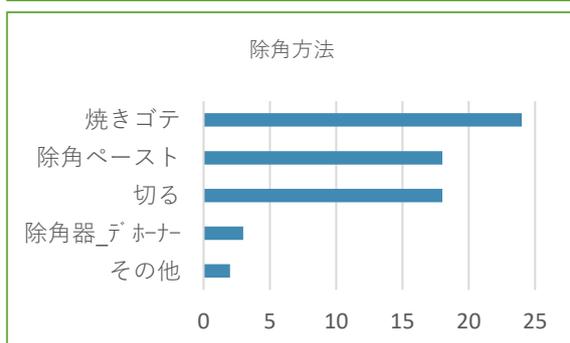
ミルクを溶かすお湯、全乳を温度計で確認している酪農場は全体の 1/4 でした。下痢が少なければ神経質になりすぎることはありませんが、厳寒期や子牛の体調がバラつきやすいとき、哺乳担当者が変わるときなどには、温度管理も見直してみましょう。

### ◆ 除角、時期、方法



除角は若齢のうちに行った方が子牛にとってのストレスが軽く、保定も含めた作業者の負担も少なくて済みます。

町内では、35%の酪農場が1~2カ月齢以内に除角を済ませています。



除角方法は焼きゴテの処置が最多で、次いで除角ペーストでした。いずれも、ツノがわずかに生えてくる（触ればわかる程度）生後 10 日齢前後に済ませます。

痛み止めや麻酔を使って除角している酪農場もありました。作業がスムーズで、子牛の予後も好感触とのことでした。

長く伸びたツノを除角器で切ると出血量が多く、育成牛に負担がかかる上、白血病がある牛群では白血病伝播のリスクが高まります。複数頭数の一斉除角の場合は止血方法や除角器の消毒など、見直すポイントがないか再確認していただきたいです。

子牛のストレスや作業者の負荷軽減、伝染病伝播リスクの低減などから、できるだけ若齢での除角作業の実施を推奨します。



町内のめす子牛出生率が増えていると聞きました。X精液の活用、意識的な後継牛の留保など、地域に浸透しつつあるのだと感じています。健康で強い後継牛を育てて、経営の効率改善につなげていただけたらと思います。（久富聡子）

今回まとめた“哺育育成牛の飼養管理についての聞き取り結果”の報告会を2月に実施予定、と前号にてお伝えしたのですが、日程調整がうまくいかず開催時期未定となりましたので、決まり次第、改めてご連絡します。